

2022.1.13 水俣学講義

石牟礼道子と 水俣学

法政大学名誉教授
田中優子

「水俣学」をどう考えるか？ 「谷中（やなか）学」からの発見

- ・ 1885年頃から渡良瀬川の魚類の大量死。鉍毒被害が顕在化
- ・ 1891年の議会で田中正造が鉍毒質問を行い足尾鉍毒問題は全国に知れわたる。農商務大臣陸奥宗光は、足尾銅山経営者・古河と被害者のあいだに示談契約を結ばせる。
- ・ 1896年、大洪水によって鉍毒被害が広がり、1897年、1900年に数千人の農民が東京に押出し（請願運動）をおこなう。
- ・ 1902年、鉍毒問題の、治水問題へのすり替えがおこなわれる。

「水俣学」をどう考えるか？ 「谷中（やなか）学」からの発見

- ・ 1904年、日露戦争の時期に田中正造が谷中に入る。その後、谷中での学びを「谷中学」と呼ぶ。「谷中村にてすらも鉍毒の害と云ふを忘る。百人中九十九人はただ水害と云ふ」
- ・ 「社会の事イヨイヨムツカシク、下層人民ノコト到底ソノ真相ヲシルベカラズト思フホドナリ」
- ・ 「ただ感心なのハ谷中人民の忍耐ニて候。我々の考の上ニてありし。・ ・研究研究。精々研究いたし申すべく、真相未だ相分りかね候点これあり候。

「水俣学」をどう考えるか？ 「谷中（やなか）学」からの発見

- ・ 1907年、上流と下流の被害農民を分断し、甘言と強権をもって下流の谷中村民を遠くは北海道のサロマベツ原野などに移住させた。かつて陸奥の秘書で前年まで古河鋳業の副社長だった内務大臣原敬は、遊水池化に抵抗する16戸の残留民に土地収用法を適用し、強制破壊を行った。
- ・ 「水野、間明田二人とも病人で、きものぬれたハもとより、而も水の中に安座して怒濤をさけるまで殆ど平気、・・・この人々の自覚ハ神二も近き精神」
- ・ 「及バざるもの必しも愚にあらず。智者必しも智ならざる」

「水俣学」をどう考えるか？ 「谷中（やなか）学」からの発見

水俣の患者さんたちは、全存在を奪われ、海も空も、言語を奪われたにもかかわらず、相手を殺すことを考えつかなかった。決定的な治療もなく、日々苦しみ続けて……。生まれたときの姿のままの胎児性患者さんもある。亡くなった方を解剖すると小脳などはハチの巣状態になっている。にもかかわらず「ひとさまに二度とこういうことがないように」と、人類の受難を引き受けた気でおられる。患者さんにお目にかかるたびに感動しています。雄々しく、気高く目の前にいらっしゃるのを書き残さなければ、と思いまして。この能がきっかけになれば、と思っています。（新作能『不知火』とミナマタ）

「水俣学」をどう考えるか？ 「谷中（やなか）学」からの発見

「谷中問題を見よ。治水上の問題也。鉍毒の問題なり。憲法の問題なり。人道の問題なり。経済の問題なり。衛生の問題也。生命の問題也。国体上の問題也。私人の問題にあらずして国家社会及び個人の問題也。谷中の貧乏人ハ追ひ出すとせるも人権の問題なり」

→あらゆる問題を凝縮した総合的問題

水俣学の範囲とは？

- ・「真の文明ハ山を荒さず、川を荒さず、村を破らず、人を殺さざるべし」（1912年 田中正造）→「真の文明」を求めるあらゆる環境学
- ・谷中学に見られるように、その土地の人々の多様な真の姿を知ること。

水俣学の範囲とは？

- ・石牟礼道子の著作は、それじたいが道子の育った前近代の水俣が丹念に書かれている。
- ・「島原天草一揆」がチッソ東京本社籠城と重なり『春の城』となった。天草も含めた不知火の物語になっている。

→江戸東京学：江戸時代と近代東京の学のみならず、武蔵野を含めた東京圏の、古代からの研究になっている。→時間軸を長く、範囲を広く

→ブローデル『地中海』のように、「不知火海」の学になり得る？



水俣病から
新型コロナウイルスまで

災禍の時代によりみがえる
世界的文学者の思想



石牟礼道子もだえ神の精神 苦海・浄土・日本

田中優子



集英社新書

2012年の石牟礼道子さんとの対談写真



石牟礼道子全集・不知火（藤原書店）

- 第1巻 初期作品集
- 第2巻 苦海浄土 第1部 苦海浄土 第2部 神々の村
- 第3巻 苦海浄土 第3部 天の魚 関連エッセイ・対談ほか
- 第4巻 椿の海の記 ほか エッセイ1969-1970
- 第5巻 西南役伝説 ほか エッセイ1971-1972
- 第6巻 常世の樹・あやはべるの島へ ほか エッセイ1973-1974

石牟礼道子全集・不知火（藤原書店）

- 第7巻 あやとりの記 ほか エッセイ1975
- 第8巻 おえん遊行 ほか エッセイ1976-1978
- 第9巻 十六夜橋 ほか エッセイ1979-1980
- 第10巻 食べごしらえ おままごと ほか エッセイ1981-1987
- 第11巻 水はみどろの宮 ほか エッセイ1988-1993
- 第12巻 天湖 ほか エッセイ1994

石牟礼道子全集・不知火（藤原書店）

- 第13巻 春の城 ほか
- 第14巻 短篇小説・批評 エッセイ1995
- 第15巻 全詩歌句集 エッセイ1996-1998
- 第16巻 新作 能・狂言・歌謡 ほか エッセイ1999-2000
- 第17巻 詩人・高群逸枝 エッセイ2001-2002
- 別巻 自伝

石牟礼道子がその作品群で示した 「水俣学」のテーマの可能性

- 1、近代とは何か？ とりわけ戦後の高度経済成長によって私たちは何を失ったか？
- 2、「もだえ神」という言葉によって表現されていた天草・水俣地方の共感の力。
- 3、「たましい」と表現される人間の徳義、山川草木の命と人の命を同じ価値に思う価値観。
- 4、「鬪い」：江戸時代の百姓一揆を決定づけた「島原・天草一揆」の籠城と戦いが後に残したもの。

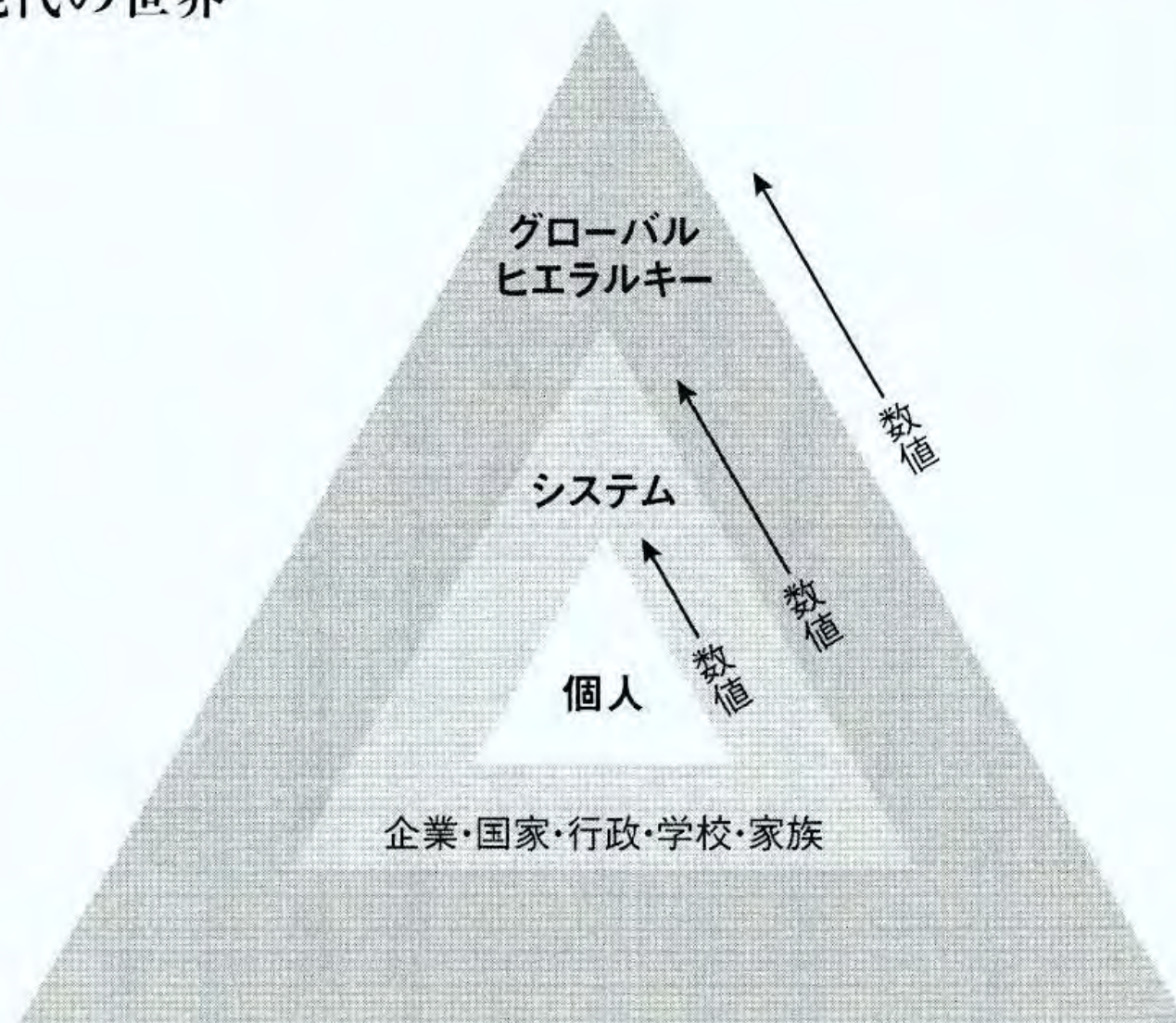
石牟礼道子がその作品群で示した 「水俣学」のテーマの可能性

- 5、古代から現代までの、女性の歴史。地域史。
- 6、古代から現代までの、共同体のありかたの歴史。地域史。
- 7、「食べごしらえ」という言葉で表現していた食べ物の歴史。
- 8、「もう一つのこの世」として考えられていた精神の歴史。

テーマ 1 「戦後日本の経済成長は何であったか？」

- 水俣湾の周辺の漁村中心に猫やカラスの不審死が出て、猫踊り病だと言われ始めたのが1952年。それからしばらくして、1956年5月1日に水俣病が公式に確認される。そのきっかけとなった一人が、船大工の田中義光さんの5歳の長女だった。私は1952年の生まれ。ということは、その水俣病患者は私だったかもしれないと、『苦海浄土』と出会った私は思った。
- 杵太郎のおじいさんが語った、天竺までつながっているこの海で、天の与えてくれた魚を食べて生きているという日常、そしてその喪失。近代工業時代は、まさにそういう生活がなくなっていく時代だった。

近現代の世界



テーマ2 「もだえ神」

- ・ 誰かが窮地に陥ったときにたまらない気持ちになる。そしてとにかく、もう理屈も何もない、駆けつけて、そして加勢したいと思う。どうにもならないかもしれない、助けられないかもしれない。だけれどもとにかくそばに行って加勢したい、応援したい、助けになりたい、と悶える。悶えるのは、助けられないから。

- ・ 『春の城』には、さまざまな登場人物が出てくるが、多くの人たちは貧困と差別の中にいる。天草四郎はそういう差別の中にいる人たちを見るたびに、もだえ神になる。チッソ東京本社籠城の時は石牟礼さんがもだえ神だった。

テーマ3 「たましい」

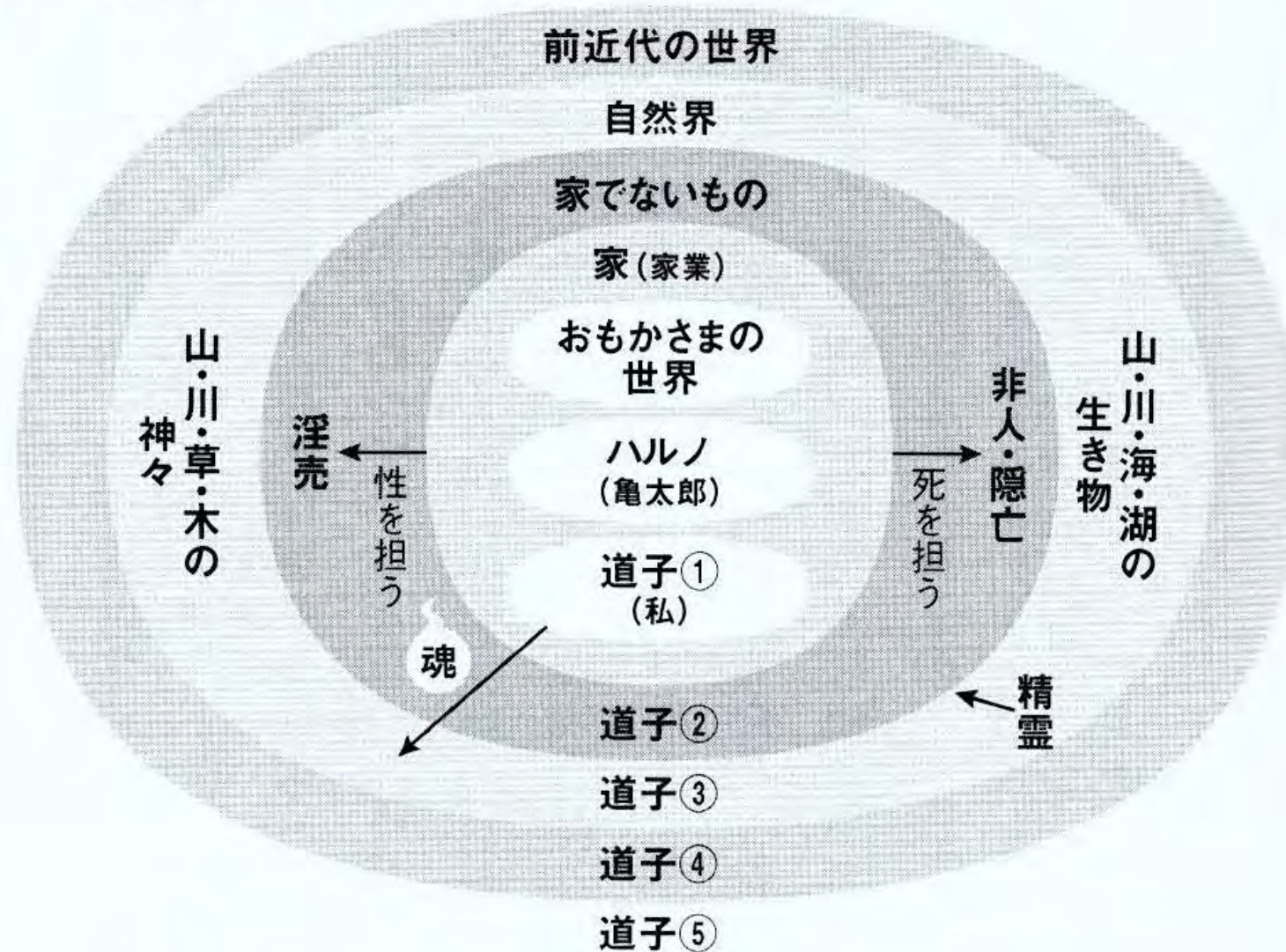
- 石牟礼さんにとって、なぜそれが大事なテーマになるのか。「もだえ神」が失われているから。つまり魂がなくなっている。水俣病は、近代人が魂を失って抜け殻になった、その過程を見せてくれた。
- 魂は「個人」として見ることができない。全ての人の魂と私の魂は同じところにある。つまり個人という境目がない。
- 境目がないというのは、例えば朝露の一滴と私の命が同じであるということ。それにはどちらに価値があるとかないとか、ではなくなり、山川草木みな同じ価値になる。

テーマ3 「たましい」

- ・「やまももの木に登るときゃ、山の神さんに、いただき申しやすちゅうて、ことわって登ろうぞ」父の声がずうっと耳についてくる。
- ・「井川ば粗末にするな。神さんのおんなはっとばい、ここにも」孫たちが散らかすつわ落の葉を、手拭いをかぶった婆さまたちがていねいに片付ける。
- ・（神さま方は）「海からそれぞれの川の筋をのぼり、村々を区切って流れるちいさな滝川に至りながら、田んぼの畦などを、ひゅんひゅんという声で鳴きながら山にむかっておいでになる」（『椿の海の記』）

石牟礼道子の世界

死の世界、彼岸、宇宙



テーマ4 「闘い」

- 一九七一年、石牟礼さんは水俣病の患者さんと一緒にチッソの東京本社に籠城し、そのときにこの『春の城』の構想を得た。チッソの東京本社が原城、つまり闘いの拠点だった。
- チッソの本社にいて、みんなと一緒に籠城した。そこには日常の生活があって、みんなで笑い転げたり、冗談を言い合ったりして過ごしている。
→ 『苦海浄土』二部、三部

第二章 闘う共同体



1970年5月 厚生省前 撮影＝宮本成美

テーマ4 「闘い」：一揆

- 原（はる）の城。1637年から38年にかけて、原城で壮絶な戦いがあり、3万7000人が亡くなった。これは「島原・天草一揆」という百姓一揆でありキリシタンの戦いでもあった。
- 島原藩の松倉家が、極端に過重な年貢、拷問、処刑を行っていた。唐津藩の寺沢家は石高の偽造をおこない重税をかけていた。キリスト教徒に対する斬首や火刑もあった。
- 幕府はオランダに助けを求めている、天草を中心にしたポルトガル（キリシタン側）とオランダ（幕府側）の戦争になりそうだった。もしなっていれば、日本におけるヨーロッパ同士の間接戦争に発展した。

テーマ4 「闘い」：一揆

- それまでの土一揆と全く違うことが起こった。情報がすぐに大坂に流れ、大坂を通じて江戸に届いた。徳川幕府が急遽手配をして使節を送り、諸藩の軍隊を動員してこれを圧制するということを、瞬く間に決めていった。原城側は3万7000人、幕府側が、12万人の軍隊に膨れ上がっていく。
- 島原・天草一揆によって、「明確かつ具体的な要求」と「手順」を整えた江戸時代の一揆のパターンができた。

テーマ5 「女性の歴史」

- ・ おもかさまは、ちょっと目を離した隙に乱れた着物姿であちこちを徘徊した。そのおもかさまを探しに行き連れ帰るのはいつも幼い道子の役目であった。

- ・ 「おもかさまのそのような姿は、この界限に出没する異形のものであったにちがいない。雪の降る日も跣（はだし）のまんま、左の足は象皮病に罹って異様に肥大しひび割れている。着せても着せてもひき裂いて、あらわな肌が出る腰巻の、前も後もはだけほどけてしまうめくらの狂女と、道筋の昼間にはなじまれぬ昼風呂帰りの雛御前たちが、白い蓬髪と、黒い洗い髪を風になびかせ、一本の青竹につらなりながら道行をするさまは、人目をひくに充分だった」（『椿の海の記』）

テーマ5 「女性の歴史」

- ・「あそこの嫁御は女のくせ、朝っぱらから新聞広げて読みよらす。よっぽど暇人ばい」新しく来た嫁たちは、そういう村の気風に試されるのが常だった。（石牟礼道子）
- ・「おなごは三界に家なし」と父親の亀太郎に繰り返し脅され
- ・代用教員を退職し、二〇歳そこそこで父の決めた相手の家に嫁に出された。
- ・夫の実家の石牟礼家に「嫁じょ見習い」として半月ほど入った。
- ・あけの明星が出る頃水汲みに行く。往復20回
- ・道子は新婚四ヶ月で3回目の自殺未遂をする。

テーマ5 「女性の歴史」

書くのは「もう皆が寝静まって、繕い済ました後で、電気を小さくして……」（石牟礼道子）

（高群逸枝 『女性の歴史』 の）背表紙を見ただけで、全身をしびれのようなものがつき抜けたのは尋常なことではなかった。あまりの無学さと、文学への深い餓えのために、眩暈が起きたのだったろう。その時わたしは三十六歳だった。（中略）そこに書かれた内容を、夫をはじめ、知っている限りの男性に話してもだれも理解すまい、とさえ思われた。学問の書として書かれてあるのに、わたしにはむしろ、旧約の詩篇のように読めたのである。
（石牟礼道子）

テーマ5 「女性の歴史」：高群逸枝

高群逸枝（1894-1964）は、熊本県豊川村（現・宇城市）生まれ。1919年に橋本憲三と結婚。詩人であり、日本の女性史学を始めて創り上げた人である。道子が衝撃を受けた『女性の歴史』ほか、『母系制の研究』や『招婿婚の研究』で、女性史学を新しい女性の視点で研究し、そのかたわら平塚らいてうらと従来の結婚制度や「家」制度に異を唱え、女性運動を展開した活動家でもある。『火の国の女の日記』第三部が絶筆。

テーマ 6 「共同体」

- 「火葬場の隠亡の岩殿は、日の昏れ方のお葬式のうしろからついて行って、夜中か夜明けに、水俣川の川口の千鳥洲の、なよなよと夜も揺れている芒の土手道を、提燈とぼして行き来していた・・・」
- 「岩殿は、無人のとんとん村にやって来た最初の住人とかで、兄者の方は、犬猫の皮をはいで太鼓三味線を自分で張って・・・」
- 「わたしの家は、水俣でいちばんさい果ての村の、そのまたはずれの墓場と避病院と火葬場の間の、舟納屋のような藁小屋に、栄町から移り住んだのである」（『椿の海の記』）

テーマ 6 「共同体」

- 共同体というのは、万物が呼吸しあっている世界だと思ってきました。（石牟礼道子）
- 「新しい共同体」——今までとは異なる共同体とは何か。・ ・ 男性と女性が結婚して子供を産んでという、そうした家族の共同体ではなく、道子は「家」以外の共同体を夢想していた。
- その共同体にあっては、女性はもちろん必要とされつつ、排除もされず、否定もされず、女性だけが奴隷のように働かされて、「おなごのくせに」と侮蔑もされない。古代にはそうした共同体が存在していた。そこでは人間だけでなく、動物や植物や、海のものたちが等しく生を謳歌できた。（田中優子『苦海・浄土・日本』）

テーマ7 「食べごしらえ」

- 春が闌（た）けてくると、塩味だけで味付けしたよめ菜飯が歳時記のようにつくられた。
- 芹飯、紫蘇飯、筍の飯、ぶえんずし。
- 春の海のくさぐさと、野の芽立ちぼくさぐさを集めた五日も六日もの雛の祭のときのちらしずし。
- あした、あさりご飯をつくろうとおもえば今日、あさりを採りにゆく。
- 海に降りる山道のついでに、つわ蒨もわらびも山椒も採れた。
- そら豆は、小豆や大豆よりもここらの土質に合うらしく、・・・どこの畠でも作っていたのである。・・・一年中に使う餅やだんごの餡にはなくてはならぬものだった。（『椿の海の記』）

テーマ7 「食べごしらえ」

- 立派に乾き上がって選別された穀物を、いよいよ挽き臼にかけて母親が挽くと、その傍にいて、ごりごりと一粒ずつ石の下ではじける音を聴く時の充実は、幼い者にも感ぜられる。穀物がほとばしらせている陽の暖かみや、一粒一粒に蓄えられた雨の滋味が、上の臼と下の臼の間で砕けて、大地の乳のように香り漂ってくる。（『食べごしらえ おままごと』をめぐって「おいしいということ」）
- 『食べごしらえ おままごと』とそれをめぐるエッセイ：石臼でひいた小麦で作る団子やうどん、自分たちで摘んできた草の浅漬け、かまどの余熱で焼くサツマイモ、にが瓜、山芋、むかご、タラの芽、川エビなどのおいしさが書かれている。他の著書にも、不知火海で採った貝や魚のおいしさ、漁師たちの食べ物の豊かさ、漁でとれたものををを狙って浜辺に集まる動物たちの面白さが書かれている。

テーマ8 「もう一つのこの世」

- 『春の城』には、「もうひとつのこの世」という表現がたびたび登場する。たとえば、四郎の父・益田甚兵衛が四郎についていうこんな語りがある。「あれはわしらの子であるが、ひょっとすれば、もうひとつの世から遣わされた子かも知れんぞ」
- 「天国はこの世のものではありません。天国に生れ替るは神の計らい。それをおのれの計らいのごとく口にすることはできません。わたくしの思うておりますのは、この世の境界を越えたところに、いまひとつのこの世が在るということでござります」（『春の城』四郎の語り）
- 道子の夢想する「新しい共同体」は、不平等のはびこる現実世界では成り立ちはしないだろう。

ユージン・スミスの撮った 胎児性水俣病患者・坂本しのぶさん



胎児性水俣病患者の坂本しのぶさん（撮影＝アイリーンM.スミス©アイリーン・美緒子・スミス）

ユージン・スミスのもっとも知られた写真
マリアとキリストの「ピエタ」を思わせる



桑原史成さんが2013年に撮った 坂本しのぶさん（56歳）



桑原史成 『水俣事件』 より松永久美子11歳（1962）



私と1歳違い。生まれる場所が違っただけ。
胎児性水俣病は私の世代が受けた被害だった。

桑原史成 『水俣事件』 より1970年・東京

